

◇ヴィラ=ロボス：ショーロス第1番

ヴィラ=ロボスはブラジル出身の20世紀を代表する作曲家ですが、クラシックの技法にブラジル独自の音楽を取り込んだ作風で知られています。ショーロスとは、民俗舞曲に基づくブラジル風のセレナードとも言うべき音楽であり、第14番までの作品ごとに楽器編成が異なっています。時には都会風のダンス・ミュージック、時には荒々しいエネルギッシュな舞踏と、さまざまな表情を見せる作品となっています。第1番は1920年に作曲されたギター独奏曲です。

◇F. タレガ：涙

タレガは、20世紀クラシックギターの礎を築き、独奏楽器としてのギターに関心が行ききかけを作った人物と見なされています。この曲は、一説によると娘の死をきっかけに作った曲だと言われています。甘美で優しいホ長調の主題に悲劇的かつメランコリックな中間部が交代して現れ、娘に対する愛情とその死に対する悲しみが表現されているのかも知れません。楽想は「涙」そのものであり、2つの8分音符が顔をつたって落ちる涙の様を表現しています。

：アルハンブラの思い出

有名なこの曲は、スペイン南部グラナダにあるアルハンブラ宮殿を訪れた際の印象をもとに作曲されました。ギター独奏のための性格的小品となっていますが、高度な演奏テクニックであるトレモロ奏法を活用した曲としても名高く、右手の薬指、中指、人差し指で一つの弦を繰り返すばやく弾くことによりメロディを奏でます。

：アラビア奇想曲

『アルハンブラの思い出』に並ぶタレガの傑作の一つとして知られています。作曲者の代表曲というばかりでなく、クラシックギターの人気曲ともなっています。しかし短時間の演奏の中にギター一曲の魅力の全てが詰まっていて、演奏者の音楽的力量を要求する曲でもあります。技術があれば弾くことは容易であっても、必ずアナリーゼ（分析）しなければならない、内容のある曲とされています。だからこそ聴く人を魅了することになります。

◇I. アルベニス：「スペイン組曲 作品47」より第5曲「アストゥリアス」

アルベニスは、スペインのカタルーニャ地方で生まれ、4歳の時にピアノ演奏をするほどの天才児でした。教師で作曲家のフェリペ・ペドレルよりスペイン音楽の作曲を勧められます。スペイン組曲作品47は8曲からなり、それぞれスペイン各地を放浪していたころの印象を素晴らしいほどに、うまくまとめたものとなっています。アストゥリアスはスペイン北部にあり、起伏の多い海岸線と内陸の険しい山地からなり、谷間や牧草地に恵まれた地方です。この豊かな自然をギターの奏法により表現されており、独特の色彩感が表出されています。曲はリズム主題が次第に高まりをみせ、神秘的な雰囲気をもつ中間部へ移り、再び第一部が回帰され、コーダへと至ります。

：「スペイン 作品165」より第5曲「カタルーニャ奇想曲」

作曲者が精力的な活動をしていた時期の作品であり、故郷のカタルーニャ地方の雰囲気を想起させる作品となっています。穏やかな曲調ですが、左手のシンコペーションのリズムが、音楽に推進力を与えています。旋律は非常に優美に歌われ、転調とともに高まりをみせてきます。朴葵姫によると、スペインの波の動きをイメージしながら弾いているといいます。

：「スペインの歌 作品232」より第4曲「コルドバ」

コルドバは、アルベニスのお気に入りの都市のひとつであり、アンダルシア州の中心部にある後ウマイヤ朝の古都で、世界遺産に登録されています。冒頭部は教会の鐘の音で始まり、ドリア調のフォーブルドンの和声が使われています。

：「スペイン組曲 作品47」より第3曲「セビリヤ」

セビリヤは、中世より新大陸との貿易の独占港となり、積極的な交易活動を行っており港湾都市として栄えました。その雰囲気をたたえた作品で、舞曲セビリャーナの速いテンポがリズムにの

り、祭り（復活祭聖週間）の主題が情熱的に謡われます。また、それとは対照的に、中間部では哀愁ただよう宗教歌サエータもきかれるスペインらしい曲となっています。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・休憩 20 分・・・・・・・・・・・・・・・・

◇L. ブローウェル：旅人のソナタ

- I. Vision de la Amazonia アマゾニアの情景
- II. El Gran Sertao 偉大なる奥地
- III. Danza Festiva ダンス・フェスティバル
- IV. Toccata Nordestina トッカータ・ノルデスチナ

レオ・ブローウェルは、キューバのギター作曲家であり、特に重要な現代に生きる作曲家のひとりともいえます。初期作品はキューバの民俗音楽の影響を受けた作品を書きましたが、のちに現代音楽へも興味をもち多くの作品を書いています。演奏曲はブローウェルの2つのギターソナタのうちの第2番です。日本ではなかなか演奏される機会の少ない作品で、ギタリストにとってもなかなかの難曲のひとつのようです。現代曲なのですが、惹きつけるものがあります。前半は、予想がつかないような動きの連続ですが、後半はリズムカルになっていくアマゾンの地を冒険しているような、シーンがどんどん移り変わるような、そんな風を感じながら聴くことができます。ちなみに、朴葵姫は、スペインに留学していた時、この楽曲をギターデュオ「アサド兄弟」の弟、オダイル・アサドにレッスンしてもらっています。ブローウェルがこの楽曲を献呈したのがこのアサドです。

◇菅野ようこ／佐藤弘和編：花は咲く（NHK東日本大震災復興支援ソング）

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）の被災地の復興を応援するために制作されたチャリティーソングで、日本放送協会（NHK）が震災後の2011年度から行っている震災支援プロジェクトのテーマソングとして使用されています。作詞の岩井は「この歌は震災で亡くなった方の目線で作りました」と、また作曲・編曲の菅野は「100年経って、なんのために、あるいはどんなきっかけで出来た曲か忘れられて、詠み人知らずで残る曲になるといいな」と語っています。

◇R. ディアンス：ヴァルス・アン・スカイ

ローラン・ディアンスは、フランスのクラシックギター奏者、作曲家、編曲家です。代表曲である《タンゴ・アン・スカイ》や《ヴァルス・アン・スカイ》は、独特のメロディ・ラインやリズム、哀愁とエスプリが複雑に織り込まれ、心地良い空気となり流れていくものとなっています。タイトルの「スカイ」はフランス語で合成皮革。牛皮革が特産のアルゼンチンの、本場の「ワルツ」ではなく、「偽物のワルツ」というウィットを含んだタイトルが、ディアンスらしい代表作と言えます。ただし単に模したということにとどまらず、曲中ではスケールやコードを効果的に用いたフレーズが現れるといった「遊び心」が加えられています。

：リブラ・ソナチネ より 第3楽章 フォーコ

代表作品のひとつである《リブラ・ソナチネ》は、〈インディア〉〈ラルゴ〉〈フォーコ〉の3楽章からなる15分ほどの大作で、20代のころの作品と考えられます。ディアンスらしい書法や特殊奏法が散りばめられており、もっともよく演奏される曲の1つとなっています。

タイトルの「リブラ」とは「天秤座」のことで、作曲者自身の星座を指しています。アルペジオから始まる第1楽章に引き続き、スフォルツァンドで始まる第2楽章〈ラルゴ〉に続いていき、広いダイナミックレンジと鮮やかなハーモニーで聴き手をドラマティックな世界へ誘って第3楽章への期待を高めます。そして次にくる〈フォーコ〉は、派手なテクニックとそれが織りなす独特な音響で悪魔的な魅力を感じさせる最終楽章で、コーダまで疾走するように勢いよく進み続け、最後は特殊奏法をふんだんに用いたフレーズで爽快に作品を締めくくります。